銀行資本、預金・発券業務成立の必然性

目

はじめに

第一章
宇野弘蔵氏のマルクス利子・信用論批判

第二章
宇野説における“暗黙の前提”

第三章
日高普氏の所説の検討

第二節
銀行資本の成立をめぐって

第三節
預金・発券業務の成立をめぐって

第四章
大内氏の所説の検討

楊枝
嗣朗
信用論における中心的論点の一つは、銀行信用を遊休貨幣資本の融通・媒介—遊休貨幣資本のたらい回し論—として説くのではなく、銀行信用における一覧払債務の貸付・信用の利子生み資本化し、信用創造の根拠を解明することである。前稿（本誌一巻一號所収）でみたように、川合一郎氏が遊休貨幣資本の利子生み資本としての開口部と信用貨幣への途が閉ざされていると考えられたからであろう。信用理論の根本問題—（九五四）—の強調されてきた利子生み資本視角からの信用論の展開における利子生み資本化の根拠を、銀行信用が商業信用の継承、社会化したものであることを求められたからと思われる。われわれもまた川合氏と同様に、債務の貸付債権の利子生み資本化の根拠こそ、信用論の方法と展開を規定する背景となる形態や信用の利子生み資本化の根拠を明らかにすることができるからである。信用論展開におけるいまひとつの中心的論点は、（一）平均利潤の形成と、（二）債務資本の所有とその資本の機能との分離という点である。換言すれば、資本の蓄積過程で形成される蓄積貨幣（→遊休貨幣資本）が、産業資本・商品取扱資本から人格的とも分離されるという事態が社会的にいかにして生じるのかを明らかにすることである。
銀行資本、預金・発券業務成立の必然性

『利益生み資本』の形成、「産業資本からのその分離は、産業資本の発展の、資本主義的生産様式そのものの必然的な所産である」とは、右のべた事態は、ただ外部的前提されるのでなく、資本的運動の中から理論的に説かれなければならない。

まず、宇野弘蔵講の問題提起——『資本論』第三部第五編第二章における「貨幣資本家」「機能資本家」の想定に対する批判——は、この貨幣資本の所有と機能の分離という論点にかかわる。貨幣資本の所有者が資本家社会的に利用されることが考えられる宇野氏の問題意識は、右に引用したマルクスのそれと大差はない。にもかかわらず、以下でみるように資本の貸付を選ぶ—「貨幣資本家A」と、無文の「機能資本家B」をア・プリオリに前提し、AからBへの貸付から「貨幣...」...は、資本的生産の基礎上では資本に転化されるが、それらは利潤を生産する。...かのようにして貨幣は、貨幣として有する使用価値のほかに、一つの追加の使用価値、すなわち、資本として機能するという使用価値を受ける。貨幣の使用価値は、この場合にはまさに、資本に転化した貨幣が生産する利潤に存する。可能の「潜在的」資本・利潤を生産することに帰着するが、資本は資本として商品となる。この展開は、第五編に先きながら、第四編第二九章で「貨幣取扱資本」を論じ、それが銀行業に転化することである。貨幣取扱業—利益生み資本—銀行業という「歴史的」展開が第五編での貸付資本の理論的展開をさまたげたというのである。
商業信用の再融資の論理的基礎とみなす者の方法が、貨幣資本の所有とその機能の分離、信用制度の形成、貸付資本を資本の再生産過程から内部に展開しようとするものであることは言うまでもない。しかし問題は、商業信用から利子・信用論を始めるその方法によってそのような分離、そして貸付資本の生成が説明できることである。本稿で詳細に検討するように、「資本論」への批判にもかかわらず、野沢氏におく論争は、この論点にかかわるものである。本稿で詳細に検討するように、「資本論」への批判にもかかわらず、野沢氏の多い役割を認めると言えはならない。商業信用→銀行信用という方法を堅持し、商業信用との関連においてマルクスの批判は、野沢氏の利子・信用論におけることに至るような欠陥を克服することは不可能である。

次稿における余興の展開を先ずとりにしてのべるならば、商業信用論の二つの中心的論点である（1）余興信用の効果を説明する利子・信用論の利子生息資本の根拠、（2）余興信用における一覧の権限の貸付→信用の利子生息資本の根拠、（3）余興信用における効果を説明する利子・信用論におけることの至命的な欠陥を克服することは不可能である。

本稿は、野沢派信用論の検討をつづけて、前稿ともに商業信用から始まる銀行信用論の論理的破綻を確認しようとするものである。

1. マルクス『労働論』第三部上巻、青木書店、四八〇頁。
2. マルクス・エンゲルス全集21巻、人民書店、六〇・九頁。
銀行資本、預金・発券業務成立の必然性

（講座資本論の解明／第四部分／理論書－九五二年－の見解に即して）

以下のように述べられている。「私は銀行の本質を次のように考えさせていただく。貨幣取引と金融取引（貸付取引）を一つのものとして行うのが銀行取引の本質であって、それを行う特殊なる社会的場所である。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる」というようなことである。以下同じ。

銀行の本質は貨幣取引と金融取引を一つのものとして行うが、銀行取引と金融取引は一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。銀行取引と金融取引が一つのものとして行われる。
第一章
宇野弘蔵氏のマルクス利子・信用論批判

宇野弘蔵氏がマルクスの利子・信用論に対してなした問題提起は、利子・信用論を研究する多くの著者に、大きな衝撃を与えるものであった。大内力氏は、その衝撃の大ささをつぎのように語っておられる。「マルクスの方法は、『資本論』にとらわれふりまわされていた多くの研究者にとって、まさに自ずから避けざるを得なかったが、宇野派の論者の中にも優深しつつある。例えば、浜野俊一郎氏は、最近の利子・信用論をサーベイした労作の中で、以下のように指摘されている。『第五編の理論的構成をなして、はじめて根拠的な疑問を提出されたのは宇野弘蔵氏である』。
銀行資本、預金・発券業務成立の必然性

が理論的にどのようにして発生するのかを説明しないで、それをいきなり始めから前提出して考察をするという考えである。

「この問題の理解は、……。」利子つき資本と信用制度との関係を把握するさいの重要な試金石をなしていると考えられる。

大内、浜野氏が述べているように、宇野氏のマルクス批判は、「資本論」第三部第五編で想定された「貨幣資本家」と「機能資本家」との対立が理論的にいかに発生するのかを説明しないで、貸付資本をいきなり外部に与えることから利子・信用論を展開しているということに始まる。

マルクスが利子生み資本の概念規定を与えるためになら、この想定に関して、利子は、理論的には利潤のえられる資本の投資をさして、その一部たる利子をうるにすぎないような資本の貸付を選ぶ「貨幣資本家」なるものを想定する。と云える。またこの「貨幣資本家」に対応して想定される利子は「預備生産の形成と内部的関連をもって明らかにされ、それらの組み合わせによって資本の形成——供給とその需要、信用との関係を再生産過程の運動と少なくとも直接的には関連しないものにょ

金利生活者階級の増大に比例する資本の貸付階級の増大をめていることである。しかし、金利生活者階級というものを知って貸付を

マルクスの方法上の混乱は、以下の点にあらわされている。「第一に、第二章で利子歩合が利潤率の動揺にはま

ったようにわからなく低落する傾向がある」として、ラムジー『富の分配に関する一覧』（一八三六年）からの引用をなし、
銀行資本、預金・発券業務成立の必然性

暗味にする一切の付加物から純粋かつ自由に考察することをしさかんに妨げられることになった。氏によれば、貨幣取扱資本は「銀行資本の、いわば付随的業務として、それに吸収されるもの」であった、「本来の貨幣取扱資本として考察されるべき銀行資本の規定は、何等本質的な関連を有するものとはならない」のである。換言すれば、「資本論」が第五編に先立って第四編で「貨幣取扱資本」を否定したが、両者のかかわりを軽視されたのである。「問題は、第四編から第五編までの連絡を、業者・信用諺と銀行信用生成の論理とその規定に基づく。第二に、それに深くかかわるといわれる第五編の抽象的方法と展開という問題を製造された。戦後の信用諺研究は、実証を示し、さらに「資本論」の「貨幣資本家」と「機能資本家」という想定に対して示された批判を、三宅義夫氏は、以下のような説明をもって「資本論を」解釈しておられる。「資本論家、商業資本家が遊休貨幣資本を利子生むべく投じるさい、これら資本家は貨幣資本家、貸付資本家たる資格に立つことになる。これら資本家は資本をその資本を利子生む資本として投じることによって、そのかぎりにおいて、貨幣資本家、貸付資本家たる資格に立ち、かかるものに転化する。
「機能資本家」たる産業資本家や商業資本家が資本循環の過程で一時的に遊休する貨幣資本を利子を生むべく運用して受けつがれている。マルクスは「資本所有者」とか「貸付貨幣資本家」をいう規定によって、資本の循環運動における個々の所有者を意味している。「貸付可能な貸資本の形成にともなって、資本家が遊休資本を生み出すこと」という新陳代謝的な過程をとらえている。三宅氏が「貨幣資本家」をいう規定によって、資本家を遊休資本を生み出すことと解釈している。三宅氏は「貨幣資本家」をいう規定によって、資本家を遊休資本を生み出すことと解釈している。
銀行資本、預金・発券業務成立の必然性

第二章　字野氏の利子・信用論における「暗黙的前提」

利子を資本の再生産過程との関連をおさえ、資本の運動の中から説くべく、マルクス利子論を批判された字野氏は、

39
利子つき資本の成立を、商業信用関係を基礎に展開されている銀行信用において、産業資本のもつ遊休資金が銀行を媒介に融通されることから説かれる。

商業信用は個々の産業資本が、その利潤の源泉をなす剰余価値の生産に直接役立たない種々なる遊休資金を相互に融通することによって、そうできない場合には無用に遊休せしむることになる資金を、生産過程に資本として投じしめるものである。

しかし、商業信用の形成が商業流通に限られ、しかも一一定の使役価値を有する商品の生産を基礎とするものであり、さらに商業手形のもう一つ流通限界から、そこでの遊休資金を介して賃金を支払い得るということがなされる。そこで資本制産業の発展は、この一一定の使役価値を有する商品の生産を通じて賃金を支払い得る、ということができる。商業資本家が行うことを媒介する、預金と貸付の形式をもって媒介される。そして一一定の遊休資金を社会的遊休資金に集中させる、その必要に応じこれが融通される、ということができる。銀行は、多くの産業資本家の間に行われる銀行信用が、銀行の如き金融機関によって媒介される。資本の再生産過程において遊休資金の存

在は、商業信用の融通を社会的資本の融通を代えるべく、社会的なる。敷居は、馬ルークスの『資本論』の観点において、 Shelfに銀行の如き金融機関が、資本社会の再生産過程に集中させられ、その必要に応じこれが融通されるということがなされる、いうことになると、といった形で、媒介の機関としての銀行、そこの遊休資金の集中がさらい、
銀行資本、預金・発券業務成立の必然性

なら前提されてしまっては、『貸付資本を資本家生産過程を基礎にして説くものといえる』のである。すなわち、個々の銀行資本を社会的銀行資本に集中する、根拠が説かれていないのである。

下平尾氏は、以下のような形で宇野氏を批判されておられる。宇野氏の方法は、『対象の発生から、対象の本質を規定し、得られるべき結果を前提しないわけにゆかない』。例えば、『遊休資金が銀行に集中されることで、遊休資金が銀行に集中したのでは、解決不可能な条件を含めており』、したがって、『この論理は』、下平尾氏の如き理由は、『銀行の如き金融機関に集中させられたのはなぜであるのか、半分の前提とされ、下平尾氏の如き理由は、軍の如き優位をとる者が、現金の如き金融機関に集中させられたのはなぜであるのか、半分の前提とされる』。

宇野氏が預金、貸付関係を基本とみる見解を批判して以下のようなべておられる。

『商業信用、銀行信用、債券等の発行、社会的根拠を有するものは、預金を社会的根拠とするものとして銀行信用を債券、貸付等を取扱える見解は、『商業信用の場合は、手形の流通という関係を基本的と考え、その手形の流通の限界を克服するものとして銀行信用を移すというものは、預金を社会的根拠とするものとして銀行信用を債券、貸付等を取扱える見解は』』。
銀行資本、預金・発券業務成立の必然性
遊休貨幣資本の銀行への集中という問題を川合氏は、「歴史的に産業資本の成立以前から残していた銀行が、いま、社会的規模での信用の象徴の受動的役割を担当されるにいたるのでは、それまで銀行の果していた貨幣取扱業務によるものである。」（著作集一，第六巻，一九六頁）と論じている。

かような観点に基づき、川合氏は、「貨幣、銀行、産業、経済、立地に関する問題の実態は、産業の形態と経済の形態を表現するものである。」（著作集一，第六巻，一九六頁）と述べている。

しかしながら、川合氏のいう銀行の集中は、現実における銀行の集積性を示すものである。それは、銀行の集中が産業の統制、経済の形態を形成するに寄与することを意味する。

したがって、銀行の集中は、産業の形成と経済の形態を形成するに寄与することが示される。
第一章 日高倉氏の所説の検討

第一節 日高倉氏の問題提起

字野利子・信用論においては、銀行業や遊休資金の集中が「暗黙の前提」とされ、資本の運動のなかからいかにその方法を観察してみるべきか、字野氏の彼の方法が問題提起される。これに形成されているのが説明されておらず、また「発行の貸付」なる銀行信用の形態的特質が無視されているが、このことを字野派内部で最初に自覚的に提起されたのは日高倉氏ではないかろうか。氏は、字野説が含む欠陥を字野氏の方法で解決しようとする試みを

川合氏の説明によれば、以下のような展開するのに必要な資本家社会の機構の要請するのであって、それが銀行信用は商業信用と関係のないからである。銀行信用のためには、単に商業資本の存在を前提するばかりではなく、銀行信用に要請するだけでは十分でなく、その関係のために必要な中核である。銀行信用のためには、商業信用の関係をなすものと言われる字野説に対し、「銀行信用の基本的関係をなすもの」というのは要

現金による預金——現金貸付が「銀行信用の基本
するに、銀行は直接資本家と資本家とのあいだに介して一方から貨幣を借り入れることを他方に貸付けるというものです。その主張を、
発券は、......銀行信用を銀行信用タガムとする資本の貸借関係を自己にたいする貨幣の貸借関係を発行することにより、商業信用をとおして資本家相互間をおなった戦略を形成されるものである。

宇野氏によれば、不動に偏重されていた発券発行を中心の位置にとる常識は、商業信用を中心に発行関係に応じての発券発行の必要性を高めるべきである。しかし発券発行を個別的な手形を社会的化するのを批判される。すなわち、発券の直接の信用製造から解放された手形の出現が要請されるのである。

このようにして、発券発行の必要性が高まると考えられると、発券発行の手形を社会的化するという必要性をもつべきである。さらに、発券発行としての資本の支払準備金が独立の資本となり、銀行は支払準備金を基礎に手形を銀行券で振替えるわけであって、預金はただ、その支払準備金を追加されるという意味をもつべきである。

それでも日高氏は、宇野氏の方法に従って、以上二つの問題、第一に銀行信用関係の現状を社会的に規制されていることが重要でないかという問題と、第二に預金発行を発券発行の必要性を有する中に立てることがいうのである。
銀行資本、預金・発券業務成立の必然性

第二節 銀行資本の成立をめぐって

日高氏は、銀行資本成立の根拠にについてつぎのように問題を設定された。銀行資本の成立を「資本主義自体の論理性」によって明らかにさされなければならない」とすると、「貨幣取扱資本からの歴史的道は否定され、残るところは」
銀行資本、預金・発券業務成立の必然性

に疑問をいただかざるをえない。第一に、日高氏は『資本論』を検討され、『信用関係』をきわめて良好なる貨幣取扱業を説いた「マルクスの欠陥」と批判され

ついてあるが、この批判は、単純な、それでいて意識的かつ巧妙なミスリー・ディニングに基づいている。「資本論」が

にすりかえ、しかもその「信用関係」を再び「商業信用」として、マルクス批判を行っておられるのである。第一

四編第一九章の検討は次稿にゆずるが、「貨幣取扱資本は信用関係と不離のものと考えざるをえない」、

は、氏によってはいわば刺身の妻にしかすぎず、何もわざわざ第一九章などが検討することもなくなるのであろう。

第二に同様に紛れにすぎぬ主張は、簿記費用を信用関係と商業信用にともなう費用とのべらなければならない」として、「第一

九章のべられた貨幣取扱業務を、商業信用にともなうものとしてとらえなけり」として、「第一

九章のべられている」という意味の簿記を、単に記帳一般が商品形態のもとにあらわれるというだけではなく、商品経済に特有のものとする

関係を表現している。余りにも大雑把な事実認識や推測から氏の理論が構成されているのに驚きを禁じえない。私自身、簿記

会計史の門外漢であるが、すくなくとも複式簿記の生成を商業信用関係の展開にもとめる見解は、私には初耳であり、A・C・リトルトン、R・ドゥ・ローヴァーやわが国の森谷勝美氏等の研究の中にそうした見解を見出すことができない。

複式簿記生成要因」としてあげているのは、書法、算術、私有財産、貨幣、信用、商業資本である。この点、ドゥ・
銀行資本、預金・発券業務成立の必然性

から生ずる純粋に技術的操作としてあつかったことになると、第一に、貨幣取扱資本の規定は、資本の生産過程が前
提され、そして、産業資本の「転化形態」として展開される必然性がないより、前期的形態と共通したものとなる。

「近代的貨幣取扱業」が前期的な貨幣取扱資本とどこが違うのか、説明されていない。その理由は、資本主義的銀行資本が決定的に異なっている点は、預金業務の比重である。なぜなら、預金業務は、預金業務の比重である。なぜなら、預金業務の比重である。

「銀行資本」なるものが、いかなる必然性から、まるいかなる動機から銀行業務を展開するのか明らかにされておられない。

第三に日高氏の主張にとってより深刻な点は、預金業務にともなう流通費用の独立、集中したものをとして理解される「銀行資本」なるもののがいかなる必然性から、まるいかなる動機から銀行業務を展開するのか明らかにされておられない。

氏は「銀行資本を、産業資本の全体が必然的に生みだしたもの」として説く。それとも、産業資本が銀行信用を展開するためには、銀行資本の所要を銀行信用に規定し、銀行資本の規定を与え、その銀行資本が銀行信用を展開するためには、銀行資本の規定が銀行信用の所要をもって生みだされる。よって、預金業務は、預金業務の比重である。なぜなら、預金業務は、預金業務の比重である。なぜなら、預金業務は、預金業務の比重である。
発行日：

『日本の歷史』

53

Early Modern Europe, Selected Studies of Raymond de Roovere, 1974, p. 120. キャリブリタウンレディサッリ

Medieval Merchants, A Kirshner ed. Chicago, Business, Banking, and Economic Thought in Late Medieval and

第三節 預金・発券業務の成立をめぐって

【商業信用から展開したものとしての銀行信用の正しさ理論】からすると、発券こそ「銀行信用を銀行信用たらしき不可欠の要素」であると言わざるを得ない。山口重克氏や鈴木編『原理論』がその銀行の持つ預金を重視する理由を示す。以下にその記述から知られる。「預金は預金を強調したのは、銀行信用が両出資金の根拠が預金であり、つまり社会の再再生産のなかから形成された遊休資金にほかならないことを明らかにしたことから生じている。このことは、資本主義社会における銀行信用の意味を理解するうえに無視することのできない大切な考え方であり、これを明らかにした宇野氏の功績はいうまでもない」。}

【『原理論』のように考えれば、銀行資本を金貨資本と区別されたものとして預金が理解されるか、しかし「銀行資本」が預金業務を重視される理由は、「商業信用の限界に新しい説明をもたらすことによるものである。」】

【商業手形形が完全な社会性をもたれている理由は、商業信用の限界に新しい説明をもたらすことによるものである。】

【「商業信用」における利用者が社会的に採用されていることが説明できなくなるのではないか」（にも関わらず……）

【期間をあらかじめ貸しておいたとして、その期間はそれ以上に利用することができなくなるが、手形が流通する、滞留させる等のため、資本の動きを阻害する。】
銀行資本、預金・発券業務成立の必然性

を円滑にすることがある。

しかし、そのような遊休資金を含む個別資本的事情に制約され、常に手形の滞留に対応しうるわけではない。そこで、これを解決するのが銀行資本の預金である。個別資本が遊休資金から流動手段として機能しうるだけの社会性をもつことになる。これは、預金を基礎に手形がおきかえられるべき発行される銀行券を、完全に流通手段として機能しうるだけの社会性をもつことになる。これによって、商業手形を置きかえたものとしての銀行資本の発行して、商業手形に置きかえることになる。小観向けにみていくと、氏は、銀行預金業務発行業についての説明は、ほぼこれが終る。小さなことからみていくと、高氏の預金業務、発券業務についての説明は、ほぼこれで終わる。何処かで終わるが、商業手形、預金業務を銀行信用に組み込むために、銀行券流通の背景に預金を据えられたのであろう。しかし想定された事態は、なおともと奇妙なことに、商業信用の与信者があたかも街の金融業者であるかのようである。それにより手形が発行される発行する資本性が含まれてはいないであろう。
山の上の森の水辺にいた小鳥は、大きな木に飛び移りました。

（続）
銀行資本金預金・発券業務成立の必然性

がわれわれは預金獲得ノノハを問題にしていのでなく、預金業務なり発券業務が資本の運動かいかにし
て形成されるかという、その論理的必然性を探ったのである。

それぞれ個別性をもっているさまざまな個別資本金の遊休資本が、もし社会的に集中されるとしたら、それはそれ
自身、個別性を脱却した資本金ということができ、これを準備とした手形については信用度の個別資本規制を解
き、それぞれが融通されるということになる。このことにつれての必然性を論理的必然性といえれば、宇野氏が遊休資本を「銀行の如き金融機関に集中させ、その必要に応
じて発券業務におきかえれば、商業手形から銀行券へということ開くことができるであろうし、また「原理
論」が発券業務の基礎に自己資本をおいたのにたいして、預金をおきかえれば、それが産業資本の資金供給に直結す
ることを明らかにする。……正しくは発券業務と預金業務を一組として述べればよいためである。銀行券の貸出、し
たがって発券業務におきかえれば、商業手形から銀行券へということ開くことができるであろうし、また「原理
論」が発券業務の基礎に自己資本をおいたのにたいして、預金をおきかえれば、それが産業資本の資金供給に直結す
ることを明らかにする。……正しくは発券業務と預金業務を一組として述べればよいであろう」と言われるだけ
でいいのであろう。まさに川合氏の指摘されているように、この一組の内部構造を、論理的必然性を説きえずに終らざるをえなかったのは、手形割引において
被削引人が求めるのは「貨幣形態の先取り」であって、商業信用それ自体に個別資本の限界をもつ手形を、完全に
社会性をもったとされる銀行券に置きかえられればならない必要性など存在しないからである。それゆえ、そのよ
ら論理的に導びすことなどもともと不可能であったと言えねばならない。

いまや、商業信用が「信用制度の自然発生の基礎である」という叙述を手がかりに、商業信用と銀行信用の論理的
基礎に据えて、利子・信用論を展開することの論理的破綻は、明らかと思われるが、依然、最初にかかまがったポ
第四章
大内力氏の所説の検討

日高説において、預金業務形成の必然性が説きやすいに終ったことをみて、大内氏は、「商業手形の限界はそれがあがり、銀行券」という論理系列により、預金の出発点に商業信用を据え、利息差を論じたのち、銀行券という形で商業信用に関する課題を提起した。しかし、宇野、日高氏等は同様にもの利子・信用の論点の出発点を指摘しているのであるから、預金に関する必要性をなんらかの形で商業信用に関連づけざるをえない。そこで考えつつあたったのが、日高氏にならって商業信用の限界についての新説である。大内説は以下のよう、筋の通じていない。

従来、商業信用の限界—商業手形流通の限界—という脈絡で、「商業信用から展開された銀行信用の必然性」が語られていたが、商業信用の限界はそれだけでなく、すなわち、「商業信用によって利用され、節約されるのは、流通資本部分だけ」であり、「これを遊休資金の社会的利用・節約という点からみれば、それが商業信用のひとつの限界を意味することはある。」このように商業信用によって節約されない遊休資金の存在は、ただ単にその保管に一定の流通費用を必要とさせるというばかりでなく、それが利用を節約されない遊休資金の存在は、ただ単にその保管に一定の流通費用を必要とさせるというばかりでなく、それが利用を節約されない遊休資金の存在は、ただ単にその保管に一定の流通費用を必要とさせるというばかりでなく、それが利用を節約されない遊休資金の存在は、ただ単にその保管に一定の流通費用を必要とさせるというばかりでなく、それが利用を節約されない遊休資金の存在は、ただ単にその保管に一定の流通費用を必要とさせるというばかりでなく、それが利用を節約されない遊休資金の存在は、ただ単にその保管に一定の流通費用を必要とさせるというばかりでなく、それが利用を節約されない遊休資金の存在は、ただ単にその保管に一定の流通費用を必要とさせるというばかりでなく、それが利用を節約されない遊休資金の存在は、ただ単にその保管に一定の流通費用を必要とさせるというばかりでなく、それが利用を節約されない遊休資金の存在は、ただ単にその保管に一定の流通費用を必要とさせるというばかりでなく、それが利用を節約されない遊休資金の存在は、ただ単にその保管に一定の流通費用を必要とさせるというばかりでなく、それが利用を節約されない遊休資金の存在は、ただ単にその保管に一定の流通費用を必要とさせるというばかりでなく、それが利用を節約されない遊休資金の存在は、ただ単にその保管に一定の流通費用を必要とさせるというばかりでなく、それが利用を節約されない遊休資金の存在は、ただ単にその保管に一定の流通費用を必要とさせるというばかりでなく、それが利用を節約されない遊休資金の存在は、ただ単にその保管に一定の流通費用を必要とさせるというばかりでなく、それが利用を節約されない遊休資金の存在は、ただ単にその保管に一定の流通費用を必要とさせるというばかりでなく、それが利用を節約されない遊休資金の存在は、ただ単にその保管に一定の流通費用を必要とさせるというばかりでなく、それが利用を節約されない遊休資金の存在は、ただ単にその保管に一定の流通費用を必要とさせるというばかりでなく、それが利用を節約されない遊休資金の存在は、ただ単にその保管に一定の流通費用を必要とさせるというばかりでなく、それが利用を節約されない遊休資金の存在は、ただ単にその保管に一定の流通費用を必要とさせるというばかりでなく、それが利用を節約されない遊休資金の存在は、ただ単にその保管に一定の流通費用を必要とさせるというばかりでなく、それが利用を節約されない遊休資金の存在は、ただ単にその保管に一定の流通費用を必要とさせるというばかりでなく、それが利用を節約されない遊休資金の存在は、ただ単にその保管に一定の流通費用を必要とさせるというばかりでなく、それが利用を節約されない遊休資金の存在は、ただ単にその保管に一定の流通費用を必要とさせるというばかりでなく、それが利用を節約されない遊休資金の存在は、ただ単にその保管に一定の流通費用を必要とせる
らしい産業資本の運動のなかで形成される遊休資金は、社会的に行われて、節約される必要性をもっているのであり、
銀行資本は、そのような機能を果たすべきものとして自立化する必要性をもつことになる。

大内氏は、商業信用から銀行信用を導くにあたって、商業信用の第一の限界からは商業手形→銀行券の必要性を
説き、いまひとつの遊休資金の節約利用の限界からは、遊休資金の社会的集中の必要性を提起され、そのための受け
皿である銀行資本を、商業信用に伴う流通費用とその限界にともない遊休資金の保管という二つの流通費用の個別資
本からの分化・独立したものとなる。こうして成立した銀行資本に節約・利用されなかった遊休資金が預金として集
中し、それだけで満たされるわけではない。したがって、預金の必然性を銀行資本に節約・利用されなかった遊休資金
が預金として集中的に分化・独立したものをとなる。これによって、預金の必然性を銀行資本に節約・利用されなかった遊休資金
が預金として集中し、それだけで満たされるわけではない。したがって、預金の必然性を銀行資本に節約・利用されなかった遊休資金
が預金として集中的に分化・独立したものをとなる。これによって、預金の必然性を銀行資本に節約・利用されなかった遊休資金
が預金として集中的に分化・独立したものをとなる。これによって、預金の必然性を銀行資本に節約・利用されなかった遊休資金
が預金として集中的に分化・独立したものをとなる。これによって、預金の必然性を銀行資本に節約・利用されなかった遊休資金
が預金として集中的に分化・独立したものをとなる。これによって、預金の必然性を銀行資本に節約・利用されなかった遊休資金
が預金として集中的に分化・独立したものをとなる。これによって、預金の必然性を銀行資本に節約・利用されなかった遊休資金
が預金として集中的に分化・独立したものをとなる。これによって、預金の必然性を銀行資本に節約・利用されなかった遊休資金
が預金として集中の
銀行資本、預金・発券業務成立の必然性

社会的に集中されるというにれば貨幣取扱費用の節約が達成されるという結果を指摘してみても、前者がいかにして後者を実現させるのかについてはまだ何事も語られておらず、遊休資金の社会的集中の必要性は一向に明らかにされていないといわざるをえない。

発券連名信発業は、むろん預金業務と別個に、いわば論理的にあからさまに破壊され、遊休資本の預金による利子を割引料の取得が前提されて預金業務も成立するのであるから、この二つの面は公務員のいわゆる「巻き返し」とか何かと言えないでであろう。かくて大内氏は、これでは自己の展開が「一様の循環理論法になれない」ことを認め、予金と銀行資本の成り立つに際しての集中の必要性、「資本主義それ自体の展開されるにいたるものである。

「預金・銀行資本の成立と、商業手形の流通」商業信用の成立とは、さしあたりは、異った根拠……をもっている。

この合理性は、いずれかがあらかじめ意識して追求する結果として実現されるというわけであるから、資本主義それ自体の成り立つに際しての集中の必要性をもっている。この二つのを結合法にしたすなわち資本の一部に利潤を上昇させようとする資本主義それ自体の展開される必要性をもっている。
以上の大内説について最後に一点のみ注意しておくと、氏は預金の必然性を決して遊休資金の保有一般を貨幣取扱に限定しないことである。しかし遊休資金の存在が保有という一
定の流通費用を必要とし、したがってそれは個別資金のマイナスをいめる」と指摘されている。その中で銀行の必然性に個別諸資本の「貨幣取扱費用の節約」という動機から説明することとはなかったのである。したがって小野氏の批判に直面されながらも、預
金を利子・信用論の出発点に据えるという方法そのものを否定することになるであろう。日高氏にしても大内氏にし
ても、資本論の「貸出・取扱資本」に着目されたのも、あくまで商業信用の脈絡においてにすぎなかったのである。
銀行資本、預金・発券業務成立の必然性

（マルクスは引用者）直接商業信用が銀行信用の基礎だが、いまや通説と化した銀行信用の必要性、いうのであるから、結論同様に考えよう。高次方の道をなって、商业手形が銀行券の基礎だといわれている。高次方の道をなって、商業手形が銀行券の基礎だといわれている。

「資本論」第三部第四編第一九章「貨幣取扱資本」に止まり、それに銀行信用論展開の一翼を担わせるため、金形成を論じることに至った（ただ山口氏にあっては、商業信用との関連を後退させ、貨幣取扱費用一般の節約動機から預金方法を包容せんとする宇野派信用論の傾向は、非宇野派においてマルクスのこの展開に関心が失われつつあるだけに興味深いところである。しかしながら、そのような中途半端な修正で宇野派信用論に内在する次第を切り除きようか。

われわれは、宇野派信用論ならびに川合信用論の検討を通じ、第五編に先だち第四編第一九章で「貨幣取扱資本」を展開し、そして利子生み資本論を経て、「この貨幣取扱業と結びついて、信用業者の他の側面、利子生み資本発行を基礎にするものである。また川合氏が批判するように、『資本論』の展開は、宇野氏の言われるような「歴史的事実を混入させた単なる『論理的』な発表をするか、むしろ『銀行業の実際上の発展を示したものにすぎないのであろうか。結論を先取りしてのべるならばそれはまさに『論理的』な発表であるが、銀行資本、預金・発券業務、
銀行資本、預金・発券業務成立の必然性

日高『商業信用と銀行信用』、一七頁。

以下の最近の論稿は、このような方法に一貫する疑問を抱かず、そのような理論的枠組みを要として、その中での論理的整合性の追求に努力されているように見受けられる。渡辺拓『預金と信用創造』、第三巻第四編の枠内において、すでに加藤義忠氏や鶴野昌孝氏から提起されている。それゆえ、われわれの信用論の展開が提示されるであろう。

内田、前掲書、二五七頁。

以下、前掲書、一六〇頁。『信頼と市場機構』所収、時潮社、一九八〇年。芳賀健『銀行信用の必然性』、『投資経済』、一八〇号、一九八〇年、伊藤春夏『信用制度の原理的構造』下、一八〇页、伊藤春夏『信用制度の原理的構造』所収、時潮社、一九八〇年。

内田氏は以下のようにしておられる。「ことではマルクスは、銀行資本を貨幣取引から歴史的に発展したものとし、本というものは、もしくは、社会的遊休資金、貨幣取引資本、銀行資本という観点で考えていたことは疑い入れならないであろう。いずれにせよ、マルクスが銀行資本の成立について、二元論的な論理的道筋は、商業信用、銀行信用、銀行資本という観点で、ただ並列的に説かれている。」（同、一六三頁）。

山大学『経済理論』、一八九号、一九八二年、参照。
補論

前稿や別に本稿において、われわれは銀行信用における債務の貸付を信用の貸付の根拠、川合説と宇野派信用論にみられ
る商業信用→銀行信用の上向の論理から解釈できないとのべたが、この点については川合説をとらえて、小野朝男氏が『銀行
の本質』(銀行と信用創造)を、『経済理論』(一六四年、一七八七年、一八九七)と指摘されている。これは信用創造が現実の信用創造機関としての銀行の本質であるという川合氏の説明が、『分
多に反論的の論証』にすぎず、『論理の飛躍』であることは、小野氏の言われるものとおりである。

ところが川合説への批判にもかかわらず、『銀行の本質』について『資本論』の周辺の説を解釈するかに、信用創造が現実の信用創造機関としての銀行の本質であるという川合氏の説明が、『分
多に反論的の論証』にすぎず、『論理の飛躍』であることは、小野氏の言われるものとおりである。
銀行資本、預金・発券業務成立の必然性

解明されていないだけに、そのような観点からなされていう氏の歴史的不全からも問題は投げかけられていない。氏の歴史的不全からも問題は投げかけられていない。

解明されていないだけに、そのような観点からなされていう氏の歴史的不全からも問題は投げかけられていない。氏の歴史的不全からも問題は投げかけられていない。氏の歴史的不全からも問題は投げかけられていない。氏の歴史的不全からも問題は投げかけられていない。氏の歴史的不全からも問題は投げかけられていない。氏の歴史的不全からも問題は投げかけられていない。
である（小野、前掲書、三四頁）。明かなるように信用貨幣＝銀行券・信用創造といえども、それは小野氏にあっては私営商業銀券券によらぬのではなく、法資規制や強制適用を受けていたわけである。かつ用創造を現出せられたわけである。『銀行券・信用創造』は、いつもある現貨化している観があるわけである。『銀行券・信用創造』は、いつもある現貨化している観があるわけである。『銀行券・信用創造』は、いつもある現貨化している観があるわけである。『銀行券・信用創造』は、いつもある現貨化している観があるわけである。『銀行券・信用創造』は、いつもある現貨化している観があるわけである。『銀行券・信用創造』は、いつもある現貨化している観があるわけである。『銀行券・信用創造』は、いつもある現貨化している観があるわけである。『銀行券・信用創造』は、いつもある現貨化している観があるわけである。